
緋弾の caos 原作ブレイクを目指した武偵

零崎哀識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のカオス

原作ブレイクを目指した武偵

【Nコード】

N2530Z

【作者名】

零崎哀識

【あらすじ】

哀川零の今回の転生先は《緋弾のアリア》
他の世界とクロスしていた。
感想をください。

教授（前書き）

めだかボックスを書いていたのですが、書きたいと思っていたところに行く前に、書いて面白く無かったので放置します。

《バカとカオスと原作ブレイク》、《IS カオスに原作ブレイク》は書いて面白かったので読んで下さい。

教授

ある一室。豪華な料理が乗っているテーブルに向かっている二人。

教授「考え直してくれたのかな？ 零くん」

零「いい加減諦めてくださいよ。教授」
プロフェッション

教授「君がイ・ウーを継いでくれれば万事解決なのだが」

零「寝言は寝て言うもんですよ。母さんと姉さんの相手をしろなんて死んでも嫌ですよ」

教授「赤と橙か。仕方ない。あのプランに移すでしょう」

零「それでいいんじゃないですか。あ、でもこいつは約束通りもらいますよ」

教授「分かっているよ。それが君がイ・ウーに所属する理由だからね」

零「なら文句はありませんよ。ですがブラドやパトラという考えは無いんですか？」

教授「彼らは能力が高いが、必要悪の組織のリーダーにはなれないだろう？」

零「確かにあの二人は私利私欲の塊ですからね」

そう言って零はワインに手を伸ばす。

教授「おいおい君はまだ未成年だろ」

零「固いこと言わないでくださいよ。イタリアでは中学生だって飲んでますよ」

教授「君は日本人だろうが」

零「今から戸籍移してきます」

教授「どれだけワインを飲みたいんだい？」

零「こんな良いワインそうそう飲めませんから」

教授「はあ、もういい。好きなだけ飲みたまえ」

零「ヒヤッホー！いただきますーす！」

教授「君も彼らほど無いが私利私欲に忠実だな」

零「俺はあの二人ほど欲しい物が無いですからね」

教授「その分欲しい物にはあの二人以上に容赦が無い」

零「なんのことやら？」

この世界は《緋弾のアリア》の世界。

教授「そういう事にしておこう。身内に人類最強と人類最終を持つイ・ウー？2の哀川零くん」

ただし、今回は他の世界も混ざっている。

教授「そんな君に依頼したいんだが、――――。頼めるかい？」

零「分かりました。請け負いましょう」

転生者 哀川 零。

彼が行うのは原作破壊。

しかし転生した時にはもう原作は変わっていた。

チャリジャック（前書き）

感想をください。

チャリジャック

空から女の子が降って来ると思うか？

ルームメイトのキンジならそんな状況嫌がるだろう。

何故ならそれは普通じゃ無いから。

しかし俺達が通学してるのは東京武貞校。

つまり何が言いたいかと言うと、

零「キンジ。ざまあ（笑）」

キンジがチャリで爆走している所に幼女がパラシュートで逆ラピュタ。

7

零「ちよつとオモチャが多いから減らしといてやるか」

チャリが爆発し、キンジと幼女が体育倉庫に吹っ飛ばされる。

体育倉庫には武貞殺しの銃付きのオモチャが30台程向かって行く。

零「哀川零の今日の凶器のコーナー！今日の凶器は《愚神礼賛》」

零が黒衣から取り出したのは釘バット。

零「軽ーく偽善を始めるっちゃ」

そう言うのとビルの屋上の壁を駆け下りる。

――――

零「全く。軋識さんはこんな物振り回してたのかよ。肩外れるかと思っただ」

キンジがアリアを助けた所には無数のスクラップが陥没した地面に転がっている。

零「7台程逃がしちゃったな。キンジ達どうなったかね？」

体育倉庫に向かったオモチャをキンジが弾詰まりさせた。

零「ヒスってんじゃねーか」

キンジ「零？なんでここに！？」

零「そのオモチャがあつたから遊んできた。それより体育倉庫からヒスって出てくるって始業式から何やってんだよ？」

キンジ「ちよつと子猫ちゃんね」

零「キモッ」

アリア「この強狼男は神妙にきゃっ！」

地面に転がっている銃弾でアリアが転ぶ。

零「マジかよキンジ。お前小学生に手を出すなんて。そこまで変態

とは思わなかったわ」

キンジ「誤解だ！」

アリア「私は高校生よ！きゃっ」

立ち上がろうとしてまたアリアが転ぶ。

キンジ「逃げるぞ零！」

零「了解だ。ロリコン」

キンジ「ロリコンじゃねえ！」

零「ロリコンが移るから話かけるな」

キンジ「移るか！」

アリア「待ちなさい！この卑怯者！」

零「そうでちゅね。がんばってくださいね」

アリア「~~~~！絶対風穴開けてやる！」

~~~~~

2年Aクラス

零「キンジ。リコあたりにさっきの出来事を話したらどうなると思う？」

キンジ「はぁーハンバーガー奢る」

零「えー。ハンバーガーは健康に悪いからな」

キンジ「なら何がいいんだよ？」

零「チュッパチャップス×100」

キンジ「チュッパチャップスは体にいいのかよ」

零「細かいことは気にしない」

キンジ「出費がデカイ」

零「白雪に愛妻弁当作ってもらえばいいじゃん」

キンジ「愛妻弁当とか言うな。それに弁当まで作ってもらったら悪いだろうが」

零「むしろあいつなら喜ぶ」

キンジ「???」

武藤「なんの話してんだ？」

零「キンジが白雪に弁当を作ってもらおうという話だ」

武藤「星伽さんの手作り弁当だど？羨まし過ぎるぞキンジ！」

キンジ「確かに白雪の料理は美味いが、そこまで騒ぐことか？」

武藤「なあ零。俺はこいつを殴ってもいいか？」

零「俺が許可する」

キンジ「んな、理不尽な!？」

高天原「はい。皆さん席に着いてください」

担任が教室に入ってきた。

零・武藤「「ちっ」」

キンジ「助かった」

高天原「このクラスに転校生が来ます」

武藤「女ですか？」

高天原「はい。女子です」

クラスの男子が騒ぐ。

零「キンジ。嫌な感じしかない」

キンジ「確かに」

高天原「入ってください」

入って来たのは見覚えのある幼女。

高天原「ロンドン武貞校から転校して来た神崎・H・アリアさんです。えーっと席は」

アリア「あそこがいい」

アリアが指差した先は武藤の席。言い方が悪かったな。つまりキンジの隣の席だ。

この発言に教室が沸く。

ちなみに俺もキンジの隣。

武藤「おお！お前にも春が来たか。先生、俺喜んで席代わります」

零「おい、シール……キンジ。小学生が見える」

キンジ「今シールドって言おうとしただろう！」

アリア「また小学生って言った！風穴！」

アリアが2丁の銃を抜き、零に向かって発泡。

キンジ「イダダダダ！零何しやがる！？」

防弾制服のおかげで痛いだけで済む。

零「シールドは役目を果たせ。チュッパチャップスは無しでいいから」

キンジ「お前！」

零「おい、神崎。大人なら場所を考えろ」

アリア「はあはあ、キンジこれ返すわ」

落ち着いたアリアがキンジにベルトを返す。

リコ「リコ分かった！分かったよ！これはフラグばっきばきに立ってるよ！」

キンジの後ろに座ってるリコがガタンと音を立て立ち上がる。

リコ「キーくんしてない！そして転校生がベルト持ってる！これ謎でしょ！謎でしょ！でもリコには推理出来た！出来ちゃった！」

零「リコ、その推理に確証を与えてやるよ。さっきキンジと神崎は体育倉庫から出てきた」

キンジ「零！何言ってやがる！？」

リコ「これはもう確定済だね！キーくと転校生は体育倉庫でピーなことしてたんだね！」

零「放送禁止用語は発するなバカ」

リコの発言に教室はピークに達する。

キンジ「お、お前らなあ」

ズキュズキュン！

2つの銃声が教室を静める。

短いピークだった。

もちろん発泡したのは机の上に立ち、顔を真っ赤にしたアリア。

アリア「れ、恋愛なんて下らない！」

零「リコ。あれどう思う？」

リコ「ツンデレロリっ娘」

零「同意見だ」

ヒソヒソ声で話す。

アリア「全員覚えておきなさい！今後そんな事言う奴は」

零「そうかわかするなよ。飴ちゃんをあげよう」

アリア「風穴！………あんたは無条件で風穴」

零「昼行灯シールド」

キンジ「イダダダダダ！てめえいい加減にしろよ！」

キンジも銃を抜く。

零「先生、命の危険を感じるので逃亡します」

窓から飛び降りる。

1、2時間目はサボりだな。



## 奴隸宣言（前書き）

感想を誰か感想をください

## 奴隷宣言

零&キンジの部屋

キンジ「……………何してんだ？」

零「トラップを張ってる」

キンジ「お前にまともな回答を求めたのが間違이었다。なんのためにだ？」

零「危険人物が入ってきそうだから」

キンジ「そうですか」

零「そういや神崎が俺達のこと調べてるみたいだぜ」

キンジ「ストーカーかよ」

ピンポーン

キンジ「誰か来たみたいだな」

零「開けない方が身のためだぞ」

キンジ「ん、そうか？」

ドアを開けようとするキンジを止める。

ピンポーン

また鳴る。

キンジ「出た方がいいんじゃないか？」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ポンピンポンピンポンピンポンピンポン

零「本当にそう思うか？」

キンジ「止めとく」

零「俺の予想だが、お前のストーカーだぞ」

キンジ「もしかしてアリアか!？」

アリア『居るんなら開けなさいよ!』

零「予想通り」

ズキュン!      カン!

アリア『なんで丁弾すんのよ!?!』

零「ドアの強度上げといて良かった」

キンジ「入れないからって発泡するなよ」

カチャカチャカチャ

零「リビングに退避だ。ピッキングしてやがる」

キンジ「ピッキング出来るなら発泡より先にやれよ」

ガチャ      バタン

アリア「あんた達！覚悟しなきゃっ」

バタン      プチン      ヒュー      ガシャン      ビュン

効果音説明

バタン↑アリアが倒れる音

プチン↑糸が切れる音

ヒュー↑罨が作動し、タライが落ちてくる音

ガシャン↑アリアにタライがぶつかる音

ビュン↑アリアが逆さ吊りにされる音

零「おー、綺麗にかかったな」

アリア「早く下ろしなさい」

零「だが断る」

アリア「風穴開けるわよ！」

零「銃は床に落ちてるぜ」

アリア「甘いわね」

アリアは背中から剣を二本取り出す。

零「《双剣双銃》<sup>カドラ</sup>かよ。忘れてたわ」

アリアは取り出した剣で足の紐を切ろうとするが、

アリア「切れない!？」

零「罪口に作らした特注品だぜ。そう簡単に切られてたまるかよ」

アリア「罪口? あんた呪い名と関わりがあるの?」

零「生憎まともな家系じゃないんでね」

キンジ「本題に入るぞ。アリアはなんでうちに来た?」

アリア「ここに来た理由はあるんだ達私の奴隷になりなさい」

零「どこの女王様だ?」

キンジ「意味が分からん」

アリア「つまり強襲科<sup>アサルト</sup>の私のパートナーになりなさい」

零「キンジ、お呼びだぞ」

アリア「あんたもよ」

零「俺はキンジみたいに強襲科にいたことはねえよ」

アリア「知ってるわよ。あんた<sup>オール</sup>請負科のSランク武貞でしょ」

<sup>オール</sup>請負科

原作には無かった学科。

人類最強の請負人の哀川潤を分類する為に作られた学科。

請負科は万能でなければならぬことから難易度は他の学科に比べて高い。

哀川潤はそもそも武貞ではないのだが、世界的な勝手に武貞と認められた。

アリア「請負科自体生徒数が少ないのにそこでSランク充分よ」

キンジ「俺は強襲科が嫌で、探偵科に移ったのに誰が戻るかよ。だいたい俺はEランク武貞だぞ」

アリア「入学の時にSランクだったでしょ。Eランクなのも期末試験ボーイコットしたかららしいし」

零「武貞って一番ストーカーになったら恐ろしいことが分かったわ」

アリア「だからあんた達私のパートナーになりなさい」

キンジ「どのあたりがだからなのか分からないが、あんな死ね死ね団に誰が戻るかよ」

零「というわけで答えはNOだ」

アリアの荷物と武器を外に出す。

零「だいたい人にものを頼む時の礼儀を覚えろ」

プツン

アリアを吊していた糸を切る。

アリアは重力に従って落ちた。

アリア「痛いわね！優しく下ろしなさいよ！」

零「今日は帰れ。話なら明日聞いてやる」

アリア「あんた達がYESと言うまで帰らないわ。長期戦も覚悟の上よ」

零「そうかい。だが長期戦に必要な荷物と武器が現在進行形で一階に向かっているぞ」

アリア「嘘っ！？なんで？」

零「お前を吊してた糸を切ったら落ちるように細工した」

アリア「ああ、もう！」

アリアは荷物を取りに急いで部屋を出た。

零「戻ってくるまでにピッキング対策しないと」

キンジ「お前鬼だな」

その夜は平和に眠れましたとさ。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ポンピンポン

うっせえよ！



レキ（前書き）

更新遅い

そして短い

感想ください

## レキ

アリア「あんた達！昨日はよってやってくれたわね！」

キンジ「実際やってたのは零一人だけだな」

零「うるせえな。お前のせいで寝不足なんだよ」

アリア「で、OKなの？」

零「却下だ」

アリア「なんでよ！」

零「なんでもだ。つかお前レキに見張らせてるだろ。外してくれ」

アリア「あんた気付いてたの？ますますパートナーにしたいわ」

キンジ「俺は気付かなかったからいいよな？午後はクエスト受ける予定だから」

アリア「どんなクエスト？」

キンジ「Eランクにお似合いのだよ」

零「キンジ。逃げた方がいいぞ」

キンジ「なんでだ？」

アリア「あたしも付いて行くわ」

零「ほらな」

キンジ「しまった」

アリア「待ちなさい！」

逃走中開始

零「やっぱキンジを囚にするのが一番楽だな。さてと」

零は電話をかける。

レキ『はい』

零「レキか。もう鷹の目しなくていいぞ」

レキ『気付いてたんですか？』

零「どこに居るかは分からないがな。気配は感じる」

レキ『2キロも離れているんですよ』

零「気配察知は殺人鬼からお墨付きだからな」

レキ『零崎一族ですか』

零「その通り。暇だしどっか行かねえ？」

レキ『任務中です』

零「俺の監視だろ。なら近くに居ても平気だろ」

レキ『それもそうですね』

零「行きたい所は？」

レキ『特にありません』

零「ですよー。まあ、校門で待ってる」

レキ『了解しました』

――――――

レキ「お待ちしました」

零「おう。じゃあゲーセンにでも行こうぜ」

レキ「はい」

というわけでゲーセン

零「さて何すっかな。やっぱシューティングかね」

銃をモチーフにした2人で同時に出来るやつ。

10分後

零「つまらん。簡単過ぎるだろ」

ハイスコア更新

武貞校生にやらしちやダメだな。

レキ「零さん。外野が多いので移動しましょう」

零「確かに目立つのは嫌だな。他になんかやりたいのあるか？」

レキ「あれを」

珍しいな。レキが何かをやりたいって言うなんて。

零「あれはUFOキャッチャーか」

レキ「はい」

零「じゃあやろうぜ」

景品は沈黙ヒツジ？

これってまよチキのマスコットキャラだし。

レキはワンコイン入れて始める。

零「おっ上手いな」

一発で景品ゲット。

零「UFOキャッチャー結構やるのか？」

レキ「今回が始めてです。」

話ながら2回目も景品ゲット。

零「始めてでその腕は凄いな」

レキ「零さん。あげます」

レキは沈黙ヒツジを片方差し出す。

零「くれるって言うなら貰っとくわ。小腹空いたし何か食いたい物あるか？」

レキ「カロリーメイトですね」

零「さいですか」

カロリーメイトって。確かに腹持ちいいけどそれちょイスする？

零「じゃあコンビニか」

レキ「大丈夫です。全種所持してます」

カバンの中からチョコ、フルーツ、メイプルと色々なカロリーメイトが出てくる。

零「どんだけカロリーメイトをリスペクトしてんだよ!？」

レキ「零さんが何か買いに行くなら付いて行きますが」

零「いや、チュッパチャップスがあるからそれでいいや」

制服の上の黒衣からチュッパチャップスを数本取り出す。

人のこと言えない哀川零であった。

ベンチに座ってチュッパチャップスを舐める男子とカロリーメイトを食べる女子。2人の手には沈黙ヒツジ。シユール過ぎる光景である。

零「カロリーメイトって結構のど乾くよな」

レキ「大丈夫です。これがありますから」

カロリーメイト飲用版

零「徹底してんなおい!」

――――

翌日

武藤「なあ、零ってレキと付き合ってたってな」

零「なんの話!?!」

武藤「リコが言ってた」

ダッ！

零「リコ殺す」

キンジ「奇遇だな」

キンジと合流

教室

リコ「大大大ニュースだよ！キンジとアリアが付き合ってるのはみんな知ってると思うけど、なんと零とレキも付き合っていたのだー！」

壇上に立ち大声で叫ぶリコの周りに人だかりが出来ている。

リコ「これが証拠だ！」

黒板にはアリアとキンジのペアとレキと零のペアの写真が何枚も貼られている。

ガラガラガラ

零・キンジ「リコ。ちょっと話があるんだけど（ニコッ）」

リコ「あはははは………笑顔の割に目が笑ってないよ」

キンジ「今ならむしろくしゃしてやったという殺人犯の気持ちが分かるような気がする」



零「どっかの学者が『どんな状況で殺されても構わない人しか人を殺してはいけない』と言っていた。ちなみに俺は5W1Hいかなる場合でも殺されていいと思ってる」

リコ「それって死刑宣告？」

零・キンジ「なーんだ。よく分かってるじゃん」

ダッ！

リコ逃亡

零・キンジ「逃がすか！ゴラァ！」

今日も授業をさぼった。

## バスジャック（前書き）

訂正

×武貞      ○武偵

×昨日はよってやってくれたわね

○昨日はよくもやってくれたわね

感想ください。

## バスジャック

零「キンジ。早くしないとバスに乗り遅れるぞ」

キンジ「何言ってるんだ？ 後5分は平気だろ」

零「じゃあ下に見えるのはなんと言う鉄の塊だ？」

キンジ「へっ？」

キンジがベランダから下を見る。

キンジ「なんでバスが来てんだよ!？」

零「そりゃバスが来る時間だからだろ」

キンジ「てことは……時計の時間がズレてる!？」

零「あれ乗り遅れたら、チャリだな。お前こげよ」

キンジ「じゃんけん」

零「却下だ。お前のチャリおしゃかだから貸して貰えるだけありがたい  
たっく思え」

キンジ「うつ。なんだって時計がズレてたんだよ」

プルプルプルプル

キンジの電話が鳴る。

キンジ「はい？アリアか。何っ！？零、C装備に着替えて女子寮に行くぞ！」

零「C装備って、そこまでして女子寮に侵入がしたいなんて」

キンジ「違うわ！さっきのバスが武偵殺しにジャックされた」

――――

零「という経緯があったのだが、なんで俺まで巻き込まれてんだ？」

バスジャックにあったバスに乗り込む用意が終わった。

乗り込む方法は上空からのパラシュート。俺はワイヤーを使うが。

キンジ「一個だけクエスト手伝う約束しちまっからな」

零「だからなんで俺が巻き込まれてんだよ！」

アリア「うっさいわね。だいたいなんであんたはC装備じゃないのよ」

零「だってそれダサイじゃん」

アリア・キンジ「……………」

零「固まってどうしたんだ？もしかしてカッコいいと思ったの？」

ごめんごめん。そんなことありえねえよな。その格好に憧れるのはせいぜい小学生男子くらいだよな。高校生になってその格好はイタイよな。お前らだって能力が高いから仕方なく着てんだろ？」

ガシガシガシ

零「落ちる落ちる！ビルの屋上なんだから蹴り入れるなよ！」

キンジ「好きで着てるわけじゃないがそんなに酷いのか。よし脱ごう。脱いだ方がマシな気がしてきた」

ミッション直前。ビルの屋上で蹴り落とされそうな状況。友人はぶつぶつ言ってる。

めっちゃカオス。

中空知「皆さん。そろそろ目標のバスが通過します」

インカムからの指示で3人の顔つきが変わる。

零「アリア。作戦は？」

アリア「無いわよ。そんな物」

零「はあー。脳無しチビが。レキに中空知個の能力が高い奴ら使ってるのに勿体ない。役割分担だけでもすんぞ。アリアは爆弾の対処。キンジは犯人がこっちの動きが分かるような仕掛けをしてあるはずだからなんとかしろ。俺は周りのオモチャを壊す。異論は？」

アリア「私を脳無しチビって言った」

零「無いみたいだな」

アリアがうるさいが放置。

零「そんなじゃ行くぞ」

キンジとアリアはパラシュートでバスの上に着地。

俺はバスの横を走ってる車に向かって変な形をした刀を落とした。

ズドン！

零「《双刀 鎚》。こういうところでしか使い道無いんだよな」

バスの横の車を貫き、停止させた。

それだけでなく、その車のあったところにひクレーターが出来て  
いる。

双刀 そうどう 鎚 かなづち

前回使った《愚神礼賛》は重量と遠心力によって破壊力を生むのだ  
が、《双刀 鎚》は振り回すことが出来ないくらい重い。

零「キンジにアリア。トンネルの入り口にクレーター作ったから、  
追手が行くことは無いと思う」

キンジ『仕事が早いな』

零「もう帰っていいか？」と聞きたいところなんだが、予想外な物が  
そっちに向かった」

キンジ『予想外な物?』

零「ヘリのラジコンに銃をくっ付けた物が一台。しかも俺の周りにもめっちゃ飛んでる」

キンジ『大丈夫なのか!?』

零「はあー。面倒だがなんとかする。そっちもガンバ」

こんな物まで用意するなんてリコのやつ用心し過ぎだろ。

零「前回ぶっ壊し過ぎたのを根に持ってるのか? 4世」

ババババババババババ!!

零「キレるなよ。4世」

零がリコをバカにするたびに威力が上がってく。

零「ほら全然当たってねえぞ。お前の初代、二代、三代なら傷一つくらいつけられるぞ。四代目!」

弾の嵐の中を零は踊るように避け、避けられない弾は黒衣で叩き落としていく。

零「こんなオモチャで俺を倒せると思ったのか?」

武偵殺し『お前の實力ならすぐに壊せるのに壊さないのは何故でやりますか?』

零「お前と話をしたかったからだよ。安心しろよ。インカムは切つてある」

武偵殺し『話でやがりますか?』

零「正体分かってるから声変えても意味無いぞ。リコ」

リコ『なんで分かった?』

零「禁則事項です」

リコ『ハルヒネタかよ』

零「さて話の内容だが、お前に依頼だ。キンジとアリアを殺さずに出来るだけ痛め付けろ」

リコ『キンジとアリアは殺す』

零「それはそもそも手段であって目的じゃない」

リコ『何が言いたい?』

零「報酬は二学期までにブラドを潰してやる」

リコ『!?!?』

零「で、どうする? まあ、拒否するというなら全部バラすけど」

リコ『拒否権無いじゃん』



零「その通り」

リコ『ブラドを本当に倒せるの?』

零「No. 3ごときに遅れは取らない」

リコ『信じていいの?』

零「信じるなんて綺麗事言わない。信じなくていい。俺は勝手になんとかするだけだ」

リコ『この偽善者』

零「偽物でも善いことしてんだ。何もしないよりマシだ」

リコ『確かにそうだね。早速ギリギリまで追い詰めるよ』

キンジとアリアには強くなってもらわないとな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2530z/>

---

緋弾のカオス 原作ブレイクを目指した武偵

2011年12月29日01時54分発行